ひそやかな村

Secret Villages

ダグラス・ダン▼著
中野康司▼訳

NEW ENGLISH FICTIONS
白水社

江苏工业学院图书馆
藏书章

Secret Villages
白水社

訳者略歴
一九四六年生
東京都立大学大学院博士課程中退
英文学専攻
東京都立大学助教授
主要訳書
N・S・ヌデベレ「愚者たち」（講談社）
E・M・フォースター「アレクサンドリア」（晶文社）
W・ルイス「愛の報い」（集英社）

新しいイギリスの小説
ひそやかな村

一九九二年五月一〇日印刷
一九九二年五月二五日発行

訳者 © 中野康司
発行者 藤原一晃
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三（三二九一）七八一一
編集部〇三（三二九一）七八二一
振替 東京 九一三三二八
郵便番号一〇一

理想社・加瀬製本

ISBN 4-560-04473-2
Printed in Japan

ひそやかな村

Douglas Dunn

SECRET VILLAGES

© Douglas Dunn 1985

Japanese translation rights arranged with Intercontinental Literary Agency, London through The English Agency (Japan) Ltd.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目
次

南米 7
庭にいる妻たち 37
カヌー 54
慣れっこ 72
ボビーの部屋 92
バグパイプ吹き 117
スタンリーの祖父の写真 133

キルビニン生まれ　143
テニスコート　154
庭を持たない女たち　168
ロバート君への贈り物　187
釣り天狗たち　205
クラブ・ハーモニカの一夜　218
訳者あとがき　227

南　米

シーア・ドハティーは一九三七年の九月に、グラスゴーからバーロハンへ引っ越し、村はずれに家を借りた。子供をふたり連れていたが、夫の姿が見当たらないので、引っ越した日から村の噂になった。

「いくつくらいの人なの？」

「まだ若いわよ。たぶん二十代ね。なかなか美人よ」

「それで旦那さんがいないの？　きっと兵役よ。それとも船乗りかしら」

「未亡人かもね」

「あら、めったなこと言うもんじゃありませんよ、バークリーさん。旦那さんはあとから来るかもしれないわ」

「女房ひとりに引っ越しさせて？　それも、よちよち歩きの子供をふたりも抱えて？　いいえ、

亭主とは別れたのよ。もし、結婚してたんならね」

ジャック・ドハティーは鉱山技師で、まだこの職についたばかりだった。ブラジルに利権を持つ会社に、一九三五年に採用された。彼はシーアに話をしたが、彼女には、ブラジルは何の魅力もない遠い国のように思われた。彼女はまじめに話を聞く気になれなかった。ふつうの人は南米なんかへ行かないし、自分の夫が特別の人間だなんてとても思えなかった。

「あちこちさすらうのがおれたちの仕事なんだ」夫はブラジル行きを承知したことをシーアに告げた。彼は自信にみちた、おだやかな話しかたをした。「金のことを考えなくちゃ。たった二年の辛抱だ」妻の不服そうな顔を見ると彼は怒った。大きな声は出さなかったが、すこし声を震わせながら、夫の仕事の足を引っ張るつもりかとシーアを責めた。「チャンスは木になってるわけじゃないんだ！　スコットランドにはいいことなんて何もない。ブラジルで二年間みっちり修行すれば、おれの将来が開けるんだ。お願いだ、シーア、将来のことを考えてくれ」

ジャックはひとりで南米大陸へ渡った。一九三七年の始めに彼は南米から手紙をよこし、あと三年辛抱すれば現場監督の主任に昇進させてもらえそうだと言ってきた。シーアはすぐに帰ってほしいと返事を書いた。五月にジャックは、とにかく一九四一年までブラジルにとどまるつもりだと言ってきた。

「もう一階級昇進すれば、おまえと子供たちをブラジルへ呼んで、ここで裕福な暮らしができます。ここは知識と能力のある男には、無限のチャンスがある国です」夫はいつもの改まった調子の、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

愛情のない手紙をよこした。

シーアは、グラスゴーのアパート暮らしはもううんざりだと訴えた。階段を昇るのもうんざりだし、隣人たちにもうんざりだし、夫がどこで何をしているのかをみんなに説明するのもうんざりだと訴えた。「あなたが出発したとき、ジャネットは生まれて六週間でした。つまり、父親の顔をまだ一度も見ていません。アリステアは道で知らない人にむかって『パパ』と言います。父親の顔を覚えていないのです。あなた、早くスコットランドへ戻ってください。わたしたちにはあなたが必要です」実家の近くに借家を見つけて引っ越すつもりだと彼女はつけ加えた。

シーアは子供のころに何度かバーロハンに来たことがあった。そこから数キロ離れたキャッスル・スチュアートという町で育ったからだ。彼女の父親が、その付近の適当な借家の情報をシーアに送ってくれた。彼女は二、三日実家に滞在してバーロハンの家を選んだ。

「ちょっと大きすぎやしないか?」と父親は言った。

「この家賃なら安いわ」と彼女は言った。「現場監督の主任なら充分払えるわ。とにかくゆったりした生活がしたいのよ」

バーロハンではみんなお互いのことを知っていた。たんなる顔見知りというのではなく、記憶の許すかぎりお互いの家族の歴史まで知っていた。商店主や、道で彼女と話をした連中の断片的な情報から、彼らはすぐにシーア・ドハティーについてもうすこしくわしくなった。

「亭主が南米にいるなら、どうしてその奥さんがバーロハンにいるわけ?」とある女が言った。

「よりによって、どうしてバーロハンにいるわけ？　バーロハンによそ者が住みつくなんて十年ぶりのことよ」
「キャッスル・スチュアートの人間よ。旧姓はマッソン。父親がグレアム通りで靴屋をやってるわ。ブリティッシュ・リネン銀行の先よ」
シーアがまあまあ地元の人間だということがわかって、バーロハンの住人たちはすこし安心した。夫が外国にいると、女は両親のそばで暮らしたがるものだということは、彼らにも理解できた。「でも、亭主がそんな遠くにいるのに、どうしてキャッスル・スチュアートに住まないのかしら。なんだかおかしいわね」女はまだ疑るように言った。
シーアは人当たりがよく、すぐにみんなの人気者になった。土地の連中は彼女の礼儀正しさと明るい性格に感心した。彼女はたびたび実家へ帰り、両親もたびたび娘の家へやってきた。アリステアとジャネットにはいつもこぎれいな服装をさせ、しつけもきちんとしていた。
「ドハティーさん、また泊まりがけでお出かけかね？」シーアがスーツケースを持ってバス停で待っていると、食料品屋のクライトンさんが店から出てきて言った。五歳半になるアリステアと、もうすぐ四歳になるジャネットが両脇に立ち、ジャネットのほうはシーアの手をしっかり握っていた。
「キャッスル・スチュアートへ行くのにスーツケース二つだなんて、ばかみたいね」とシーアは

言った。

「ご両親はお元気かね？」

「ええ、おかげさまで」

「このあいだ、ご主人から手紙が来てたね。郵便屋がブラジルの切手だと言って見せてくれたよ。あんな遠くから無事に手紙が届くなんて、たまげたもんだ。ご主人も達者かね？」食料品屋は言った。

「仕事の虫よ」とシーアは言った。

シーアは、夫からの仕送りがブリティッシュ・リネン銀行のキャッスル・スチュアート支店に届く日に合わせて実家に帰ることにしていた。しかし今回は、実家に一晩泊まったあと、アリステアとジャネットを両親にあずけて、二、三日グラスゴーへ行くつもりだった。

「おまえ、ほんとにお友達のところへ行くんだろうね？」と母親が言った。シーアが夫のいない生活を始めてからだいぶ経つことを、母親は充分承知している。

「ロバータ・モリソンに会いに行くのよ。母さんに嘘つくわけないでしょ？」母親に疑われていることはシーアにもわかっている。

「母さんは、おまえたちのことが心配なんだよ」母親は、ここ数か月気になっていたことを口に出してほっとしたようだった。「否定してもだめだよ。おまえの亭主があそこへ行ってからもう四年だよ。ブラジル、だったかね」みんなブラジルが悪いんだというように、憎らしそうに母親は言

った。「男はナッツとコーヒーだけじゃ満足できやしないよ。男の行き場所は決まってる。だいいち二年の約束だったじゃないか。おまえの亭主が戻るころにゃ、六年も経ってるよ」ジャックの約束違反にたいする怒りを母親はシーアにぶつけているようだった。

「みんなお金のためよ」夫をかばうようにシーアは言った。「それに母さん、あれが彼の仕事なのよ。わたしはジャックが野心家だって知ってたから結婚したのよ。夜学で一生懸命勉強して、やっと鉱山技師になれたのよ。わたしたちにいい暮らしをさせようと思って頑張ってるのよ」

「そうなってくれりゃいいがね」にがにがしそうに母親は言った。「おまえはひとりぼっちで、亭主は仕事ばっかり」

「それはわたしだって、早く彼に会いたいわ」とシーアは言った。「でも、たまにはロバータみたいなお友達を訪ねて、息抜きぐらいはしたいわ。彼女はバーロハンのわたしの家に、よく泊まりにくるの。それで、彼女の家にも遊びにきてほしいって、前から誘われてたの」

シーアは数年前、まだアリステアが生まれる前に、グラスゴーのフランス語の講習会でロバータと知り合った。ロバータは学校の教師をしていて、赤毛で、活発な性格で、どちらかといえば不器量で、まだ独身だった。子供たちを教えることと、夜間の講習会に出席することを生きがいにしていた。

「フランスへ行く気がないのに、どうしてそんなにフランス語を勉強するの？」とシーアがたずねたことがある。

「勇気がないのよ」とロバータは答えた。「イタリア語も始めたのよ。でも聞かないで。イタリアへも行くつもりはないわ。イタリア人がどんな人たちかご存じでしょ？　フランス人より悪いわ。とにかく本にはそう書いてあるわ」

ロバータは年に一、二回自宅に友人たちを招いて、明るく楽しいパーティーを開くことを楽しみにしていた。彼女の男友達は、ほとんどが大学時代か教員養成所時代のクラスメートで、ほとんどがすでに奥さんか恋人がいた。結婚も婚約もしていない連中は、ロバータはいい人だけど、自分の好みのタイプではないと、はっきりと結論をくだしているようだった。

「このあいだのロバータのパーティーへ行ってから、百年も経ったような気がするわ」とシーアは母親に言った。

「ジャックはその人たちのことを知ってるのかい？」

「知ってるわ。彼もよく一緒に行ったもの。たまには気の利いたおしゃべりもしたいわ」

「ジャックの友達って感じじゃないけどね」と母親は言った。

シーアは自分が嘘をついていることを知っていた。グラスゴーへ行くのはロバータに会うためだけじゃないということを知っていた。しかし、犯したくもない背信行為を犯したくなったのは、みんな夫のせいだと彼女は思った。夫のおかげで余計な苦汁を嘗めさせられたことに、彼女は憤慨していた。四年間の夫の不在は、望んでもいない独立心以上のものを彼女にもたらした。別居生活がひと月延びるごとに、自分が無視され見捨てられた人間だという意識がしだいにはっきりし、その

気持ちはやがて、夫にたいするひそかな憎しみへと変わっていった。バーロハンの道端で世間話をしたり、夫の野心はわがままではなく称賛すべきものだと母親に言ったりして自分の気持ちを隠すことが、だんだん我慢できなくなってきた。ブラジルで満足そうに機械いじりをしている夫の姿を想像すると、気が狂いそうになった。彼女の知らない土地で、鉱山労働者たちを監督している夫の姿を彼女は想像した。あるいは夜になって、地質データを読みふけったり、ほかの単身赴任の男たちと専門的な議論をしている夫の姿を彼女は想像した。

戦争が始まる一か月ほど前のこと、シーアは自分が妊娠していることを母親に告げるしかないと決心した。

マッソン夫人は最初は何も言わずに食器洗いを続けていたが、やがて、たらいのなかで陶器がぶつかりあう音に我慢できなくなった。彼女は手を拭きながら、きつい調子で言った。「父親は誰なんだい？　ロバータ・モリソンの友達かい？」

マッソン氏は庭の隅の堆肥の山のそばで、近所の人と話をしていた。「お父さんにはとても言えないよ」とマッソン夫人は言った。「おまえも、もうバーロハンには住めないよ。狭い土地だからね。みじめな思いをするだけさ。おまえ、自分のしたことがわかってるのかい？」マッソン夫人は怒りかつ当惑し、娘の顔に反省の色が見えないことに憤慨していた。「亭主に何て言うつもりか知らないけど、とにかくわたしには謝ってほしいね。どうしてなんだい？　おまえがこんなに馬鹿な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.